『完全犯罪』

Kanzen Hanzai

カンゼンハンザイ

トセハハクシクイ

初出雑誌「新青年」

第14巻第8号

博文館

昭和8年（1933）7月 [発行]

中国奥地八仙寨の研究施設を接收
はっせんさい
した苗族共産軍の指揮官ワシリー・
びょうぞく
ザロフが、密室で殺害された娼婦の
死の謎を解く。原稿は甲賀三郎の推
こうがさぶろう
薦で「新青年」編集部に持ち込まれ
ていたが、読切長篇を予定していた
よこみぞせいし
横溝正史が咯血で倒れ、新人の作品
が急遽巻頭を飾ることとなった。評
判喧しく、小栗はたちまち流行作家
となる。

昭和8年（1933）

超絶推理

【小栗虫太郎作品介绍2】

『黒死館

殺人事件』

Kokushikan Satsujin Jiken

コクシカン サツジン ジケン

こくし かん さつじん じけん

初出雑誌「新青年」

第15巻第5号 - 第15巻第14号

博文館

昭和9年（1934）4月-12月 [発行]

メデイチ家の血系とされる神聖
ふりやぎ降矢木家の城館に、毒殺者の彷徨
のりみずりんたろうが始まる。探偵法水麟太郎は、博
 覧強記の図書係、中世史家の執事、
 幼少時以来一步も館の外に出ない
 弦楽四重奏団の欧州人などと、街げん
がくてき学的な問答を戦わせつつ、前当主
さんてつ算哲の実験の意味と連続殺人の犯
 人を暴き出す。小栗の代表作とし
 て知られる長篇探偵小説。

昭和9年（1934）

怪異

【小栗虫太郎作品紹介 3】

『白蟻』

Shiroari

シロアリ

じてロビ

初出単行本『白蟻』

ぷろふいる社

昭和10年（1935）5月 [発行]

落盤事故で容貌も変わり果てた男は、果たして夫なのか、同じく身体を変容させて死んだとされる別の男なのか。催眠宗教団として文明世界から追われ、人血を吸ってグロテスクに繁茂する植物に覆われた弾左谿だんざだにに住む騎西家きさいの嫁滝人たきとは、その疑念に狂熱のような知で立ち向かう。グロテスク美学に貫かれた文芸傑作。

昭和10年（1935）

【小栗虫太郎作品介绍 4】

『潜航艇

「鷹の城」』

Senkotei Taka No Shiro

センコウテイ タカノシロ

ロビノイキ トテウロビサ

初出雑誌「新青年」
原題『鉄仮面の舌』

第16巻第5号 - 第16巻第6号
博文館
昭和10年（1935）4-5月 [発行]

オーストリア海軍の英雄エッセン大
佐に率いられた潜航艇「鷹の城」が漁
船室戸丸を拿捕した一週間後、エッセ
ンが死んで死体が消失し、室戸丸の八
住船長らが盲目となる事件が起きる。
時をへだて、遊覧船となった「鷹の
城」で、今また八住が不可解な死を遂
げ、探偵法水は、「ニーベルンゲンの
歌」をめぐる銜学推理を展開する。浪
漫趣味あふれる「新伝記小説」。

昭和10年（1935）

【小栗虫太郎作品紹介 5】

『成層圏魔城』

Seisoken Majyo

セイソウケンマジョウ

セイヤマシマウツトチ

日本からニューヨークを爆撃でき
る新航空動力の研究者山座博士の甥
の間太と留学生サリムは、飛行機を
墜落させて航空網を遮断する謎の南
海大魔空に向かう。天空はるかな大
怪鳥の叫び、奇妙な形に満ち欠けす
る月、生き物すべてが狂う森、謎と
苦難の果てに、怪人ハリコン博士を
倒すことはできるのか。日米戦下に
おける少年科学冒険小説。

昭和19年（1944）

初出新聞「戦時版よみうり」

昭和19年（1944）4-8月 [発行]

『海螺斎 沿海州先占記』

Besai Enkaishu Senseeki

ベエサイ エンカイシュウ センセンキ

ベエサイ エンカイシュウ センセンキ

初出雑誌「文藝春秋」

第19巻第10号-第19巻第11号

文藝春秋社

昭和16年（1941）10-11月 [発行]

天明7年（1787）、江波戸えぼと

べえさい

海螺斎は今のロシア沿海地方にあた

る地域に侵入し、厳寒の荒蕪地に

あって脱走流刑囚やコサツクなど

様々の人種や境遇の人間たちの集団

の頭となる。歴史の陰に埋もれた辺

境探検家の冒険譚。辺境の開拓や国

境の画定が文学的想像力に強く働き

かけていた時代の作品である。本作

発表後、小栗は従軍記者としてマ

レーに赴く。

昭和16年（1941）

『会議派殿下』

Kaigiha Denka

カイギハ デンカ

代々木 半平 氏

初出雑誌 「文藝読物」

第13巻第12号

文藝春秋社

昭和18年（1943）12月 [発行]

国民会議派に近かった医師関口斉一郎を師と仰ぐ王侯ブルーパル・シンジは、退位して民衆の中に入り、インドの将来への夢を関口への手紙に記すが、なぜか突然の死を遂げる。そこには、民族性を道具とした恐るべき心理的犯罪の手口が見えるのだった。コーランポー（クアラロンプール）に滞在した私（小栗）の取材という形式を採る。

昭和18年（1943）